

アメリカ人種学派の奴隷制擁護論

清水 忠 重

はじめに

アンテ・ベラム期のアメリカでニグロ奴隷制を「積極的な善」として肯定し、正当化する思想が南部社会を風靡したことは周知のとおりである。このいわゆる奴隷制擁護論なるもののひとつに、科学的な手法をもちいてニグロ人種の生物学的劣等性を論証し（あるいは論証しえたと主張し）、それに依拠して奴隷制の正当性をうちだす一派があったが、それは具体的には「アメリカ人種学派」(American school of ethnology, 以下アメリカ学派と略す)と称する科学者グループを中心とするものであり、かれらは南部奴隷制のイデオログたちの中でもきわめてユニークかつ重要な位置を占めていた。もちろん奴隷制を正当化する手法としては当時さまざまな論理が流布されていたわけであって、聖書（とくに旧約）の字句を引き合いにだして、アブラハムをはじめとする族長たちが奴隷所有者であったこと、あるいはモーセの十戒が奴隷制の存在を自明のものとして勧説されていること等に訴える手法（いわば聖書的な擁護論）もあれば、また人間の社会生活において支配・服従の関係はその不可欠の要素をなすものであって、南部奴隷制の温情主義的なむすびつきは非難さるべきよりもむしろ理想的な形態に属するものであるといった主張（いわば政治学的・社会学的な観点よりする擁護論）となって現われることもある。しかもひと口に奴隷制擁護論とはいっても、後にみるようにその各々の依拠する論理的な諸前提に応じてそれぞれ異った帰結と社会観を生むことにもなる。が、いずれにせよアメリカ学派の所論は従来、歴史家たちがこれら擁護論なるものを祖上にのせるさいには必らず論及するのをつねとした最も代表的なものに属しており、しかもその手法たるや実証科学という当時最新の思考原理に訴えるきわめて斬新なものでもあった。以下、本稿ではまずこの学派の所論を概略的に紹介し、そのうえでその思考の論理的な性格あるいは奴隷制擁護論としての有効性と限界といった一、二の点について考察を加えてみたい。

—

かつて史家 W. S. ジェンキンスはトマス・ジェファソンに言及して、この理論上のみの平等主義者は奴隷制「廃止問題の最終的な決断は人種学の分野における探究の諸結果にかかっている」と考えていたと述べたことがある¹。ジェファソンのように慎重な人物が——たとえばかれが抜きがたい偏見の持ち主であったにせよ——劣等性の論証をもってただちに奴隷制の肯定へとストレートに結びつけて考えていたかどうかはともかく、こうした思考が早くから存したであろうことは推測に難くない。1850年代にはかかる関連づけはすでに一般的な承認をえていたようにすら思われる。ちなみにイギリス人チェインバースは『アメリカの現状』(1854年)と

題する著作の中でアメリカの人種問題を論じたさい、「奴隷州たると自由州たるとを問わず、すべての州においてニグロは生来の隷属人種であり、いかなることがあろうとも決して白人と同等とは見做されえないという固定観念があるように思われる。経済的な考察はいま措くとして、この観念がアメリカ奴隷制の基盤には横たわっている。だから問題は政治的・博愛主義的な根拠にもとづいてではなく、生理学的な根拠にもとづいて論議される必要があろう」と述べたのであった²。ところでこうした背景を考慮にいれて考えるとき、アメリカ学派の標榜する人種学的手法なるものはまさにきわめて時宜を得た格好の論理であったといわねばならない。この学派の重要メンバーとしては一般に S. G. モートン、L. アガン、J. C. ノット、G. R. グリドン等の名前が挙げられようが、この中とくにモートンとアガンが学問的・実証的な研究でもってこの学派の基礎を築くことに貢献したとすれば、ノットやグリドン、あるいはヴァン・エヴリや S. A. カートライトといった人物はその扇動的・啓蒙的な筆鋒でもってモートンらの研究を、イデオロギー的な色彩を加味しつつ普及発展させたといつてよい。アメリカ学派の思想を考えるばあい、ヨーロッパの先達たちの学問的遺産を看過することもできない。すでに18世紀の後半以来ヨーロッパではオランダの P. カムペル、イギリスの J. ハンター、C. ホワイトといった解剖学者たちが顔面角の測定（オイロピーデ85〜90°、モンゴリーデ75°、ネグリーデ70〜72°）を手がけ、また人類学の創始者 J. F. ブルーメンバッハは頭蓋骨の収集に大きな関心を示すなど、こうした分野もようやく独自の地盤をきづきつつあった³。アメリカ学派のあいだでニグロの「顎の突出した」形状プログナサス（すなわち顔面角の小ささ）がさかんに強調され⁴、またこの学派の領袖モートンが世界各地からさまざまな人種の頭蓋骨を収集して——それは最終的には数百顆（600顆とも900顆とも推定されている）を数え、そのコレクションは当時世界最大のものとして「アメリカのゴルゴタ」の異名をとったとされる——、それをもとに各人種の頭蓋容量の平均値（コーカサス 87 立方インチ、モンゴル 83 立方インチ、マレー 81 立方インチ、インディアン 80 立方インチ、ニグロ 78 立方インチ）⁵を算出するなどしたのも、大きな流れから言えばこうした学統を反映してのことであった。

ところでこの頭蓋容量および顔面角の数値にみられる漸次的な「序列」（“gradation”）⁶の発見は、アメリカ学派の脳裡に白人を頂点とする人種的ヒエラルヒーの図式と、ニグロ人種の資質的劣等性の観念を深く印象づけ、白人は人種の発展段階にあつて「神の御手になる最後のもっとも完全な作品」⁷であるとの信念を強く抱かせるにいたった。しかもかれらはこの独断的な想定から、さらに様々な根拠の疑わしい科学的な命題をも派生せしめることになった。ニグロの脳はオランウータンのそれに酷似し⁸、それは白人の脳とは対照的に動物的本能の中枢である小脳が、知的機能をつかさどる大脳に比して相対的に顕著な発達をとげているといった類の主張⁹である。アメリカ学派はおなじ劣等人種を取り上げつつも、インディアンの性格については「不屈で勇敢で誇り高い」といった形容詞でもって修飾したのに対し、ニグロに関しては「従順で卑屈で模倣好き」といった表現を好んでもちいた¹⁰。そしてニグロが省察能力を欠いた感性と模倣の生き物でしかなく、臭覚と聴覚は下等動物に似てきわめて鋭敏な反面、繊細さと気品においては大いに欠けるところがある¹¹といった価値的評価を科学の名のもとに導き出

した。

こうした科学的な考察は——今日ではこれに疑似という言葉がもちろん冠せられるわけだが——また種々の社会的・イデオロギー的なコロラリーをも派生せしめるに至った。劣等人種に白人の高等宗教や文明を押しつけるべきではないといった提唱、すなわち「われわれは19世紀の特殊なわが白人文明を世界のすべての民族に押しつけんとするがごとき試みは、この上なく賢明ならざる方策である」とつねづね考えてきた」¹² (L.アガン) といった発言はその一例に過ぎない。アメリカ学派の代表的な論客 J. C. ノットはこうした点について、次のように論じている。教育によって「あの不完全な頭脳を^{エキスパン}拡大し、ニグロ人種の知的能力を発達させ、かくしてかれらをコーカサス人種の卓越性の充分なる水準にまで漸次教化していく」¹³ (傍点原文イタリック、以下同様) といった見解は錯誤以外のなにものでもない。「キリスト教はアフリカ人種の身体上の型が変化をきたさないかぎり、かれらに理解されたり採用されたりすることはないであろう」¹⁴。「過去数千年間にわたってコーカサス人種が手がけてきたところの、モンゴル、マレー、インディアン、ニグロを同じ宗教、法律、風俗、慣習等の下にもちきたそうとする数かぎりない試みはすべて失敗に終わったのであったし、また今後とも記述人種学なる科学がなにかもっと新しく、かつより実践的な処方箋を打ち出さないかぎり、失敗し続けるであろうことは間違いない。博愛主義者の試みがかくも完全に無益であった以上、われわれは一時手を休めて、ことによるとわれわれは有色諸人種の知的状態を白人の状態にまで高めようと努力することによって、自然の不変の法則に戦いを挑んでいるのではないかと自問してみるべきではないか」¹⁵ 云々。——こうした提言は当時隆盛をみた伝道家たちの独善的で自己満足的な博愛活動さえをも根こそぎ一蹴し去ってしまうという点で、きわめて徹底した性格をそなえていたといつてよい。

ニグロ・白人間に架橋しがたい資質的・内在的な溝をみとめるこうした立場が、奴隷制の肯定に容易に結びつくであろうことは多言を要しない。アメリカ学派にとってニグロは「奴隷人種」「劣等人種」「人類の最下位のもの」¹⁶ 以外の何物でもなく、ニグロ奴隷制は「わが共和政体の柱石」¹⁷ をなすものに他ならなかった。J. C. ノットはみづからの著作の執筆意図に触れたさい、私は「その御言葉によって奴隷制の存在をゆるし給うたあの同じ神が、ニグロ人種に永久的な劣等性の刻印を押し給うたのだということ、ニグロ人種をそれ相応の地位以上に高めようとする試みはすべて失敗に帰するに相違ないということを、かれら(奴隷制廃止論者)に納得させたかった」¹⁸ (カッコ内は筆者の補ったもの。以下同様) からであると述懐したし、またヴァン・エヴリはニグロの体質改善が可能ならばともかく、そうでない以上「ニグロに白人と同じ『平等』を強制するということ」は「『平等』なる事実の意味を冒瀆すること」、「自然の道理に暴力を加える所業」にひとしいものであると表明した¹⁹。もしニグロの生物学的劣等性なるテーゼが真理にもとるとするならば、アメリカ奴隷制は途方もない悪であるといった言葉は当時、人種学者たちの好んで口にしたところであるが²⁰、これはもちろん奴隷制の正当性に寄せる揺るぎない信念を裏から吐露したものに他ならなかった。

アメリカ学派の思想はより広い視野から見ると、帝国主義支配の正当性を合理化する具としても充分になっていた。ノットとグリドンの共著『人類の諸類型』(1854年)はニグロや黄

色人種が「その生れた場所へと本能的に執着する」のに対して、白人はその気質上「世界主義的」であり、グローバルな規模で活躍する進取の気象に富んだ人種である²¹として次のようにその特性を描いている。「あらゆる時代を通じてかれらには、最大の頭脳ともっとも強靱な知性とが賦与されてきた。文明をおし広め、それを完全なものにするという使命はまさにかれらのものである。かれらは本性上、野心的で大胆で、かつ支配的であり、危険をものとししない。抗し難い本能につき動かされて、かれらはどんな困難をも厭わず、あらゆる地域へと乗り出していく」²²。「国家も人種も、個々人と同様、それぞれ特殊な運命をになっている。すなわちある者は支配すべく、またあるものは支配さるべく生れついている。そしてそれがこれまでの人類の歴史というものであった。二つのまったく異なる人種が平等な条件のもとに共存することなどではしない。……(中略)……これまでコーカサスという一般的な言葉のもとに理解されてきたあの人種グループは、あらゆる時代を通じてつねに支配者であった。かれらが気候の許すかぎり、地球上のあらゆる土地を征服し保有すべく最終的に宿命づけられているということを見出すのに、ことさら預言者の眼など必要とはしない。いかなる博愛行為、いかなる立法措置、いかなる伝道活動といえどこの趨勢をおしとどめることなどではしないのだ。それは造物主の御手によって人間本性のうちに書き刻まれているのであるから」²³。

こうしたアメリカ学派の思想をいま一度くり返し要約するならば、こうなるであろう。すなわちかれらはまず頭蓋容量にみられる段階的な序列といった生物学的差異を根拠にして、白人優位の思想と自余の人種の資質的劣等性の観念をみちびきだす。そしてそれをもとにして奴隷制を自然のおきて、自然の秩序として肯定する立場をうち出す。またその人種主義の思想は一方では劣等人種にたいする徹底した異質性の意識からして、こうした劣等者にたいしてキリスト教や白人文明を無理強いすることの拒否となってあらわれるが、他方ではまたそれは帝国主義的膨脹と弱小民族支配を正当化する姿勢を示すことにもなる。こうした点をいちおう念頭に置いたうえで、次節では具体的な著作に則しつつこの学派の思考の奴隷制擁護論としての性格に検討を加えてみたい。

二

アメリカ学派の思考を集約的なかたちで表現した著作の一つに、ヴァン・エヴリの『白人の優位とニグロの隷属』(1868年)と題するものがある。ヴァン・エヴリ自身は専門の科学者というよりもむしろ「レイシスト・デマゴグ」ないし「アメリカ史における最初のプロフェッショナルな人種主義者」といった評価のほうがその本領には見合っているが²⁴、こうした人物であったればこそアメリカ学派の人種学的論理はかれにおいてもっとも端的なかたちで表現され定式化されたといってよい。この著作のなかでヴァン・エヴリはモートン以来の研究を立論の前提に据えたうえで奴隷制の擁護論を展開しているが、たとえば次の一文はこの制度の正当性をおよそくどいまでに強調したものである。

八百万の白人と四百万のニグロとが、並存状態に置かれている。後者はその欲望、本能、能力、すな

わち神から賦与された本性にふさわしく、家庭内での従属と社会的な順応の状態にある。かれらは異質の従属的な生き物であり、優秀人種にたいするその自然の關係にしたがって、異なった従属的な社会的地位に置かれている。それゆえかれらはノーマルな状態にある。このことは厳密には自明とは言えないにせよ、避けて通ることのできない真理であって、いかなる詭弁、自己欺瞞、權威ある格言あるいは誤れる推論といえど、一瞬たりとも否定しえない真理である。なぜならそれは造物主の御手によって永遠に定められた諸事実²⁴に依拠しているからである。ニグロは白人とは異質であり、劣っている。かれは異質の劣った立場に置かれており、それゆえ当然のことながらノーマルな状態に置かれているというべきである。この主張は一般的な命題として、疑いもなく真理にかなうものである。なぜなら疑いをいれる余地が毫も存しないのだから。すでに見たように神はかれを異質のものに、まったく異質のものに造り給うたのであった。その差異は全能の神のどの製作品にもまして不変のものである。神はそれゆえニグロを当然別個の目的へと——すなわち人種が並存状態にあるときにはいつでも、またそのような場所ではどこでも、異質の従属的な社会的地位へと——意図し給うたのであった²⁵。

ヴァン・エヴリはこのように説きつつも、他方ではまた徹底した白人平等の思想を説きわめてラディカルな人物でもあった。かれがイギリスの W. ウィルバーフォースらにはじまる奴隷制反対運動を「妄想、愚行、欺瞞」として一蹴する²⁶のも要するに、これら博愛主義者たちの運動が白人大衆、すなわち「かれら自身とおなじ人種に属する無知で墮落した大衆」²⁷の惨状に目をおおい、生来の劣等人種でしかないニグロの生活改善という無益な作業に腐心しているからに他ならない。ヴァン・エヴリにとって白人の平等とはいわば「神がその人種の組織体に永遠の刻印をおした自然にして不易の平等性」、「生得的な永遠の平等性」²⁸と称すべきものであり、選挙権の制限や機会の不均等は自然の理にもとるもの、是正さるべきものに他ならなかった²⁹。かれの著作には白人貧民に関して、「おなじ人種に属する無知蒙昧で悲惨な幾百万もの人々」「虐待され抑圧された幾百万もの人々」³⁰といった言葉がいたるところ頻出するが、これをまず救済の対象とすべきであるというのが、その基本的な考え方である。いずれにせよニグロに関しては終始、既成事実(奴隷制)の肯定を説いたその反動的筆鋒も、ひとたび白人社会内部に向けられるとなると、むしろ革新的なひとつの当為として現状批判の色彩すら強く帯びてくるわけである。

このいわば「白人内での平等主義と公然たるニグロ嫌悪症とのイデオロギー的結合」³¹という姿勢は一見、対照的な観を呈しているかに思われるが、じつは一步立ちいってみるかぎり、それは人種学的思考に内包されていた論理の必然的な帰結ともいうべきものであった。しかもこれら二つの側面は互いに不可分の関係で結びついていた。なぜなら社会成員の区分原理として人種なる要因が強調されるかぎり、白人・ニグロ間の溝が決定的に深められるのは当然であるが、と同時にまた白人自体について見るかぎり、この人種内部での身分や階級区分といったものは——人間本性に根ざしていない人為的なものとして——一切捨象されることになり、白人すべての同質視、平等視というきわめてラディカルな社会的帰結がもたらされるほかないからである。ヴァン・エヴリはこの二元的な論理を『ニグロとニグロ奴隷制』(1853年)の中では次のように要約した。

優秀な支配の人種はみずからのためにはデモクラシーの制度を採用する。すなわち本性上の同等者たちは（神の）掟によって平等であることを宣言されているのである。神によって同じ体質に造られ、同じ能力を与えられ、かくして明らかに同じ目的、すなわち同じ権利と義務を行使すべく意図されている者たちは、これらの権利を享受すべく保護され、かつ義務を遂行すべく課せられている。劣った体質をもち劣った能力を賦与されている劣等人種は、あたかもその皮膚の色を変えることができないのと同じように、全能の造物主が優越した身体に割りあてた諸目的を遂行することもできないのであって、かれらにとってはその特異な体質にない、かつ白人へのあの永遠の従属を終始確たるものとして定めているところの独特な制度（奴隸制）が人間の生存上からいって不可欠であるのみならず、また（それを維持することは）優秀人種に課せられた絶対的な義務でもある³²。

ヴァン・エヴリのかかる思考にあっては、白人社会の民主化は劣等人種との共存によってこそより効果的に達成されるということになりかねないわけであるが、事実ヴァン・エヴリはしばしばイギリス貴族の子弟が新大陸に渡ってのち、ヨーロッパ的伝統や封建的諸観念を捨てきして、白人デモクラシーの確固たる擁護者へと一変したことをしばしば強調したのであった³³。これら貴族の子孫が庶民との身分的なちがいをいかに云々してみたところで、「ニグロというこの自然の劣等性と比べると、卑しい白人同胞にたいするかれらの架空のものでしかない（すなわち本性に基づいていない）優越性など、いったい何であったであろうか」³⁴。

もしヴァージニアに能力と欲望の大きく異なるニグロという異人種が存在しなかったなら、つまり自然の区分というものが存在しなかったなら、そのときには階級分裂を生み出すあの富、教育、家柄にたいするプライドといった偶然的で人為的なものが社会的ならびに政治的秩序の基礎として、他の地域におけると同様ここにも残存することになっていたであろう。古い伝統と習慣をたずさえてやって来たイギリスの騎士の子孫たちは、その環境が父祖たちのそれとは著しく異なっていた以上、多分なにほどかはリベラルになっていたことであろう。だが、もしニグロという自然の区分を示すものが存在せず、もし社会の依拠すべきあの神の御手になる永遠の区分線というものが存在していなかったとするならば、依然かれらといえど、アメリカにおけるもっとも貴族主義的な一団としての性格を失わなかったことであろう³⁵。

アメリカ民主政のヨーロッパに比をみない伸展は要するにニグロが存在したればこそということになるわけだが、さらに一步進めてヴァン・エヴリはアメリカ内部の相違、つまり南部と北部の相違もまたニグロ人口の多寡へと還元されうると考える。かれは「フェデラリストたちの政策は、イギリスにおけるそれと徹頭徹尾おなじものであった。すなわちその政府たるや、なにものをも生産しない少数者がそれを通じてあらゆるものを享受し、あらゆるものを作り出す多数者がなにものをも享受しえないような機構ないし道具にほかならなかった」³⁶と述べて、「北部の寡頭制」と南部「民主政の理念」とを対置する³⁷。そしてこの独立以来のヴァージニア対マサチューセッツ、ジェファソン対ハミルトンの確執、あるいは「弱体な政府」対「強力な政府」といった政府観のちがいはつまるところ、——「いかなる地域においてもこのニグロ要素の分量と定着性に厳密に比例して、白人のあいだでの自由・平等にかんするそれ相応の明確

な見解が生じたのであった」³⁹ という言葉にも示されるように、——当該社会が白人平等のイデーを自覚させるに足るだけの充分なニグロ人口を擁していたか否かのちがいに帰されることになる。具体的に引用するならば、次のような箇所である。

かれら（北部の指導者たち）は社会の構成要素のうちにニグロという自然の下層民、すなわち社会をわかたず自然の区分なるものをもっていなかった。かれらは富と教育という人生における偶然のチャンスや出来事の結果にすぎないものしか見たことがなかった。要するに、古い社会の屑でしかないあの階級区分——旧世界ではこれが政治的・社会的秩序の基礎をなしている——以外、目のあたりにしたことがなかったのである⁴⁰。

かれらが目のあたりにしたのはただ階級区分、金持ちと貧乏人、教育のある少数者と額に汗する多数者といったものでしかなかった。かれらは現状にもとづいて政府をたてようとしたので、つねに大衆をその「支配者」へと従属せしめておきうような強力な政府を要求したのであった⁴¹。

これに反してヴァージニアはすでにのべたように、旧世界の精神的気質を投げ捨てて、その子孫たちはすでに早くから自分たちの父祖たちの伝統の枠にはまりきらないほどに成長していた⁴²。

北部はすでにのべたように、社会の下層民すなわち自然の区分をもっていなかったもので、人為的な区分にもとづくところの——爵位をもった階層、国王、長子相続法といったものはもちろん欠いているとはいへ——イギリスにおけると実質的には同じような、あの階層をわかたず区分にもとづくところの——政府を望んだのであった。なるほどどの州にもニグロはいたし、かれらがいわゆる奴隷制というノーマルな状態のもとに置かれていたことは事実であるが、（北部では）その数はあまりにも取るに足りぬものであったため、北部人の社会に影響をおよぼしたり、その精神的気質に変化を加えたりする力とはなりえなかった。（北部の）全域にわたって、そしてニューイングランドにおいてはとりわけそうであったが、代表たちはみな同じ見解を抱いていた。すなわちかれらは、すでに当時権力を行使していた少数のひとびとの手中にその権力を保持せしめ、かつ大衆をじゅうぶんに隷属せしめておきうのように、現状にもとづいたところの富に立脚する政府を望んだのであった⁴³。

かかる把握にあっては白人平等とニグロ奴隷制とは緊密に一体視されて、前者は後者をまっではじめてその堅実な存続を保証されるということになりかねないが、この思考を根底から支えていたのは一種の自然尊重の理念であったと言ってよい。ちなみにヴァン・エヴリは「人為的」「偶然的」といった言葉をかならず「自然の」「人間の本性に根ざした」「永遠不易の」「神の御手によって永遠に定められた」といった言葉と対置し、「人間の（作り設けた）制度」「人間の考案したもの」「人為的な区分」といった言葉をかならず、「自然の秩序」「永遠の秩序」「自然の諸関係」「自然の区分」「自然の掟」といった言葉と対比的にもちいている⁴⁴。そして人間の作為にかかる一切のものを偶然的、一時的なるものとして峻拒排撃し、自然的なるもののみを永遠なるものとして肯定していく。ニグロ蔑視と白人平等というその二元的ヤヌスの立場が、この自然（すなわち本性）尊重という同一の理念に発するものであることは改めて言うまでもない。それはフェシスとノモスを対立させ、社会秩序の妥当根拠を自然＝本性のがわにもとめるという点で、一種の自然法思想の立場であったと言いうるが、この立場からするかぎり人間の手になる実定法や社会制度は——それが時代と場所に依じて相対的であり、その拘束力

もまたかぎられているという意味で——なんらの正当性をももちえない。そしてただ優秀人種たる白人の平等とニグロ人種のそれへの従属というこの関係のみが、時代と場所をこえた人類普遍の法、自然の秩序としては認められることになる。この点に関連してヴァン・エヴリはイギリスを例にとって次のように論じている。すなわち、「イギリスは他のいかなるキリスト教国にもまして図抜けて豊かであり、その年間の生産高は途方もなく大きい、この富たるやごく一部のの人々によって独占されてしまっている」。そこでは「少数の者たちが日々ますます裕福に肥えふとりつつある一方、他の多くの者たちはそれと同じくらい迅速かつ確実によりいっそう窮乏化し、無知、墮落、悲惨さに拍車をかけつつある」⁴⁵。この不合理な事態はいったい何に起因するのであろうか。人間(白人)の本性がほんらい平等である以上、それが自然によって引き起こされたものでないことだけは確かである。「なんびとといえど——いかに無知なひと、あるいはいかに親英主義に毒されて『イギリス風の自由』にいちずな好意を寄せているひとであろうとも——かように驚くべき結果が、イギリスに見られるようなかかる社会状態が、自然の諸原因によって引き起こされうるなどとは到底、想定しえないところであろう」⁴⁶。——ここからしてヴァン・エヴリは「これらの恐るべき結果をもたらしたのは政府、すなわち人間の案出したものあるいは政治機構であって、それが神がほんらい平等につくり決して政治上の区別など認めていなかった被造物の間にこの大きな深い溝をこしらえたのである」⁴⁷と結論づけるにいたったが、ここには要するに人為を排することによってむしろあるべき自然の事態が回復されるという思想が暗々裡に語られているといつてよい。ところでこの自然の立場はさらに経済的な提言としては商工業の否定、農業重視の姿勢ともなってあらわれる。ちなみにヴァン・エヴリは「南部のプランターと北部の農民」の二者を「自然の同盟者」「生産者階層」と呼んでことさらに重視し、19世紀なかばに身を置きながらも、製造業、株式売買、投機はもちろん漁業までもを否定し、もっぱら農業のみを人間の生業として認めるという時代錯誤的な主張に走っている⁴⁸が、これはいわばかれがその自然の理念に固執しすぎたところによるものとみてよいであろう。

ヴァン・エヴリの自然法的な思考については以上のとおりであるが、一般にかかる自然法の立場は思想的にいつて、それが実定的な社会に関係づけられる場合、二通りのしかも正反対の方向に機能するといわれている。ひとつはその立場が既存の社会体制をそのまま自然の秩序とみなしていわば事後的に追認し、所与のものの永遠性、絶対性を保証する保守反動的なイデオロギーとして作用する場合である。そして今ひとつはこれとちょうど逆に、その立場がその理想視するところの自然状態のイデーにあくまで固執して、現実の社会関係のほうを批判に付する一種ラディカルな社会変革のドグマとして機能する場合である。この一般的な図式に照してヴァン・エヴリの思考方法を定式化するならば、こうなろう。すなわちそれは一方では奴隷制を自然的秩序とみなして肯定し、と同時にまた他方ではそれは白人平等のイデーに立って現実社会への積極的な批判の姿勢を打ち出す、ということに。いずれにせよそこでは叙上の相反する傾向がいわば同時に内包されていたということになるわけである。ただこの白人平等のイデーについて付言しておくならば——それは本来、現にある社会関係から抽出された論理と

いうよりも、人種学的思考の帰結として演繹された観念的な当為にすぎず——それはあくまでこれから実現さるべきものではあっても、これを完全に満たすような実体は現実のどこにも存在しない。しかも南部白人のヒエラルヒー社会の実情が、ヴァン・エヴリによって批判に付されたイギリス社会や北部社会以上に、この平等理念と大きく隔絶したものであったことは明らかであって、このことは後にも触れるように、かれの奴隷制社会の擁護論じたいに論理的な毀損を加えざるをえなかった。

三

アメリカ学派の奴隷制擁護論がどのような有効性と限界をそなえていたかを以下検討していくに先立って、まずアメリカ奴隷制の特徴について触れておこう。

J. F. クーパーは『アメリカの民主主義者』(1838年)のなかで、この国の奴隷制に触れてこう述べている。「アメリカの奴隷は人類の一変種に属し、所有主との肉体的相違が著しいため、将来においても人種の混交は不可能である。こうした事情から、アメリカの奴隷制は地球上の大部分の地域のそれとは違っている。古代ローマ、近代ヨーロッパ一般、その他たいの国々における奴隷と所有主の肉体的相違は、わが国におけるほど著しくないので、奴隷は自由を手に入れるとやがて周囲の大衆の中に融けこんで目立たなくなってしまう。しかし造化の神は、アメリカの奴隷に対し、こうした形で奴隷制を終わらせるには妨げになりそうな刻印を押し、そのため国家の将来におおきな禍をまねく恐れがある」⁴⁹。この点をより敷衍するかたちで、すでに19世紀の初頭、R. G. ハーパーはアメリカ奴隷制の抱える問題点を次のように要約した。

奴隷と自由な階層とのあいだの肌の色および血統のちがいに由来するこの事情こそが、アメリカの奴隷制と古代ないし近代のその他ことごとくの国の奴隷制とを区別するものとなっている。奴隷制はほとんどすべての古代国家に存在した。それは現在でもアジア、アフリカ、アメリカのいたるところに、そしてまたヨーロッパのロシアおよびトルコ領のあらゆる地域に、つまり世界の四分の三以上の地域に存在している。だが南北アメリカを除くあらゆる地域の奴隷は、その大部分が人種、血統、肌色、一般的な特徴といった点で自由人たちと同じであり、これはまた古代の場合にもあてはまる。したがって奴隷は解放されることによって隷属状態からときはなされ、諸結果をおもいわずらう必要なく自由の恩恵をぞんぶんに享受しうる道をひらかれたのであった。かれは自由な階層と対等の地位へとひきあげられ、家族ごとその階層のなかへと組み込まれたのであり、また幸運に恵まれその振舞いが立派であるならば、かつて卑賤な身分にあったという汚名をそそぎ、その思い出を抹消することができた。

だが合衆国において、かようなことは不可能である。ひとは奴隷を解放することはできるかも知れないが、かれを白人にすることはできないのであって、かれは依然としてニグロあるいはムラットーのままである。かれの血統と以前の身分を物語る痕跡や思い出はしつこくかれについてまわるのであって、あの卑しい状態がかれ自身のあるいは白人の心の中に刻みつけた感情は、その後も尾を引くことになる。かれは解放後もその肌の色やこうした追憶および感情によって奴隷身分と結びつけて考えられるのであって、かれと白人、かれと自由な階層との間にはひとつの障壁が設けられるが、この障壁たるやかれの決して乗り越えることを期待しえないものである⁵⁰。

ここで指摘されているこの特殊事情のゆえにアメリカのニグロはその肩に二重の課題を運命づけられることになった。ひとつはかれらが自由へといたる第一段階として、奴隷制という制度的桎梏から解放されること、今ひとつはこの直後に続いて持ち上る——そしていまだ解決されていない——人種差別という新たな抑圧から解放されることである。かつて史家 W.D. ジョーダンが「奴隷をニグロとして軽蔑するのは余分なことであったが、ニグロがもはや奴隷でなくなった時、かれらはただニグロとしてのみ軽蔑されえた。独立革命後の解放の洪水が、かかる意味でのニグロへの白人の嫌悪感を高揚せしめることになったのは悲劇的なパラドックスであった」⁵¹と述べ、また同様に史家 F. G. ウッドが南北戦争に言及して、「戦前においてはほとんどのニグロは奴隷だったので、ニグロに対して憎悪をあおる必要はまずなかった。ニグロたちは法的に白人に隷属せしめられていたので、かれらに『分』を越えないようにさせる聖戦などわざわざ繰り広げる必要はなかった」⁵²と述べたように、奴隷制の廃止はそれが白人とニグロのあいだの制度的障壁を取り除くという点で、まさに人種問題の赤裸々な浮上を意味していたわけである⁵³。

この事情と密接に関連することであるが、アメリカ学派の思想的な特徴はじつはそれが他の奴隷制擁護論とはちがって、奴隷制なきあとのポスト・ベラム期にも依然根強い生命力を保持しえたという点にあったと言ってもよい。自余の擁護論のばあい南部「特有の制度」が内乱の砲火のもとで潰え去り、擁護すべき歴史の実態を喪失してのちは、その理論じたい宙に浮くほかになく、戦後社会のなかで急速に忘却の淵へと沈んで行った。だがアメリカ学派の思想はむしろこうした趨勢に逆行し、ポスト・ベラム期にはレイシズムの理論として直ちに再生し、往時に倍する生命力を獲得するにいたった。『白人の優位とニグロの隷属』⁵⁴『人類の諸類型』といったこの学派の代表的な著作はその基本命題になんらの修正を加えることなく戦後社会に出回ったのであって、『人類の諸類型』にいたっては1900年になっても依然版を重ねるという盛況ぶりであった。他のタイプの擁護論者、たとえば G. フィッツヒューのような人物の場合、かれ自身きわめて卓越した論客であったにもかかわらず戦後は「まったく奇妙にも」⁵⁵ニグロ救済の機関たる解放黒人局に職を奉じるという首尾一貫性を欠いた行動に身をゆだねざるをえなかった。だがアメリカ学派のノットはこの局を指して「かつてこの国に設けられたなかで最も有害な制度」⁵⁶と、頭からこれを否定し去ることができたのであった。おなじ奴隷制擁護論者の名を冠しつつも、戦後社会の新たな状況下におかれた際、いかに異なる反応を示さざるをえなかったかをよく物語っていると言えよう。ノットやアガシらの戦後の活動(政府の人種政策への助言、人体測定器の改良等)はいってみればアンテ・ベラム期の経歴の延長線上に無理なく位置づけるものであって、本来アメリカ学派の思想というものは戦前の奴隷制よりも戦後の人種差別の擁護理論としてよりうってつけであったと言ったほうがよいのかも知れない。なぜならノットやヴァン・エヴリらの本来の意図としては確かに奴隷制擁護のほうが第一義的な重みを占めていたかも知れないが、この学派の論理の基幹はあくまで人種の生物学的優劣という点に据えられていたのであって、論理連関からする限り、奴隷制の擁護はただそのコロラリーとして派生的に導き出されたものにすぎないからである。そしてまたそれゆえに奴隷制の廃止はアメリ

カ学派の理論を宙に浮かせることなく、むしろ逆に問題状況を人種差別の方向へと一義化し明確化したことによって、かれらの理論に十全の意味での適合性を賦与したのであった。ただこのことはしかし裏から言うならば、アメリカ学派の論理が奴隷制擁護論としてはその分だけ適合性を欠いていたということの証左ともなるものであろう。

奴隷制擁護論としての効力について今少し見るならば、アメリカ学派の思想はそのもっとも基本的な命題に関してすら一、二の問題点を含んでいたと言えなくもない。たとえば人種の先天的・生物学的優劣という基本テーゼにしてからがそうである。というのはアメリカ学派はこの人種的・先天的な差異を強調するところからして必然に、地上の諸人種はそれぞれ別個の人祖をもち、その創造の初発からしてすでに内在的な差異を刻印されていたとする人祖多元論のテーゼに荷担するにいたったが、これはじつはすべての人類をアダム、イヴなる単一の人祖へと帰属せしめる聖書の單元論的教説に大きく反するものであって、当然にかかる立場は教会勢力の反発を買うことにもなった。宗教色なお濃い当時の環境にあって、このことは決して無視しうような事柄ではなかったと言ってよい⁵⁷。

人種学的思考の生む白人平等の理念もまた、南部の実情に照してみても必ずしも妥当なスローガンであったとは言えない。周知のようにアンテ・ベラムの南部では一握りのプランターによる寡頭制支配がおこなわれ、土地の兼併と集中の結果、そこでは「白人の屑」「転落者」「泥食^{ホワイ・ト・ラッレニ}い」等の蔑称をもつ貧乏白人がヒエラルヒー社会の底辺を形成していた。奴隷制はひとりニグロ人種のみならず同胞たるべき白人自体をもその疎外の対象に加えていたわけであって、南部白人の七割は非奴隷所有者であったとも推定されている⁵⁸。こうした社会的現実にたいしてアメリカ学派の掲げる白人平等の理念はどのような関係に立ちえたであろうか。考えられる一つの方途は、たとえば J. D. B. ド・ボウの次の言葉にみられるように、この平等理念をば非奴隷所有者の不満をそらし、現実の不平等を観念的に糊塗する方向へと活用することである。すなわち、

南部の非奴隷所有者は白人のステータスを保持しており、劣等者だとか従者だなどとは見られていない。かれは独立宣言が、ひとはすべて生れながらにして自由かつ平等であるというとき、この言葉がかれ自身と同じくらい等しくニグロにもあてはまるものだと告げられていない。かれは投票所において、自由ニグロの一票が自分の一票と同じ重みをもつようにするべく提案されたり、また白人とニグロの子供を学校の教室や席で一緒にし、あるいは戸外の遊戯において子供同士おたがいに抱き合わせたりするようなことを提案されたりはしていない。最近ニューヨークで見られたように、白人がニグロと実際にベッドを共にしたということを、集会の席で誇らしく口にするほど墮落しえようなどとは、かれにはまさに夢想だにしないところである。またかれは、自由州で見かけられるように、もし自由ニグロが身のほどもわきまえず建国の父祖を「無頼漢」呼ばわりするようなことがあるならば、愛国的な怒りに駆られて一撃のもとに打ちのめしてしまうであろう。南部ではいかなる白人も決して靴をみがいたり、食卓で給仕をしたり、卑賤な家事労働をするなどして、あたかも下男のように他人に仕えるというふうなことはありえない。そのようなことをすることに対しては、かれの血が反発するのであり、たとえ必要に迫られようとも、そこまで身をおとすようなことはしない。かれは（奴隷所有者の）仲間であ

り、同等者なのである。奴隷所有者に雇われたり、奴隷所有者と交流をもつ場合、かれはその邸宅に入って主人とおなじ食卓に席を占める。(白人同士のあいだに)もし違いがあるとするならば、それは教育や教養のかもし出す違いにすぎず、それとてきわめて奥ゆかしく示されるので、ほとんど人目を引くこともない。北部の貧しい白人労働者は社会的階梯の最下層にとどまっているが、これに反して、かれの同胞はここ南部ではすでに数段上昇し、自分の下にいる永久に引きはなされた人々を軽蔑しうる立場にある⁵⁹。

ここでは見られるように白人平等の理念は白人貧農の不満をニグロという最下層民の方向へとそらせ、奴隷所有者と非所有者のあいだの潜在的な対立や、前者にたいする後者の経済的・身分的な嫉みを解消せしめる一方途として活用されているわけであって、平等理念がいわばスレーヴ・オリガーキーの正当性を補強し、その社会的安泰をはかるべき一手段として逆用されているわけである。

しかし白人平等の理念はより一般的にはこれとは逆に、現実の不平等を批判に付する方向にも充分むかいうるのであって、それはひとがこの理念の実現に固執するかぎり当然の帰結でもある。たとえば『差し迫まる南部の危機』(1857年)を著したヒントン・R・ヘルパーが、その「アポリショニスト・レイシスト」とも称すべきニグロ蔑視的な白人平等の立場から、奴隷制に立脚する南部ヒエラルヒー社会の非を告発したのはその一例に過ぎない。またジャクソン期コモン・マンの代弁者たちや戦後の南部革新主義者たちが、一方ではニグロ選挙権の剥奪をうたいながらも、他方ではまた白人社会の民主化実現の方向に貢献したことに示されるように、この平等理念は経験的にみたばあい第一義的にはヒエラルヒー補強の方向よりも、まさにその逆の方向に機能するのをつねとしていると言ってよい⁶⁰。そしてまたアメリカ学派も、スレーヴ・オリガーキーの擁護を企てようとしたにもかかわらず、この不都合な帰結をわがものとしなくてはならなかった。たとえばヴァン・エヴリが、もし「自然の区分というものが存在しなかったなら、そのときには階級分裂を生み出すあの富、教育、家柄にたいするプライドといった偶然的で人為的なものが社会的ならびに政治的秩序の基礎として」⁶¹はびこることになると述べたとき、それはじつは戦後の南部革新主義者たちの発言を彷彿とさせるのであって、たとえばその一人エドガー・ガードナー・マーフィーは、「白人の意識的な結合」こそが「新しい民主主義のための幅広い基盤」たりうるとの考えから、ヴァン・エヴリと同様、「社会の民主的再編のための基礎としては、富や職業、財産、家柄、階級などによる区分よりも、人種による区分のほうが」はるかによい⁶²と述べたのであった。白人の人種的同質性を強調することによって、その分だけ家柄や階級といった人為的な差異が捨象される効力をもつことはすでに触れたとおりである。ヴァン・エヴリによる次の一文は下層民への同情と特権的なアリストクラシーへの否定とを云々したものであるが、こうした立場が南部ヒエラルヒー社会の実情と相容れないことは明らかであろう。

わが国の人々はそのほとんどが、ヨーロッパ社会の「下層階級」の出である。アイルランドやドイツの労働者のきめの粗い皮膚、大きな手足、幅広の歯並び、しし鼻等は一、二世代を経るうちに消滅して

しまい、かれらのアメリカ人子孫はもっとも恵まれたヨーロッパの特権的アリストクラシーと比較してさえ、一段と繊細かつ古典的な容貌をそなえるにいたっている。おなじ能力、おなじ欲望をもっている以上、かれらがおなじ権利とおなじ機会を与えられ、神から賦与された本性をぞんぶんに享受して生活すべき資格をもっているということは、まさに自明の真理である。主イエス・キリストはこの何ものにもかえがたい真理をばじつに印象的に流布され給うたのであった。かれはその使徒たちを最下層のもっとも抑圧された階層の中から選び給うたのであり、また祭司の座にあるアリストクラシーに向かっては耳をも聳さんばかりの調子でもって、その最も恐るべき非難の言葉を浴びせられたのであった⁶³。

こうした思想はもちろんヴァン・エヴリのみに限らないのであって、アメリカ学派の別の人物、たとえば J. C. ノットを引き合いに出してもよい。ノットがいつばうで「知的教化を施すことによって劣等人種の水準を優秀人種の水準にまで高めることはできない」⁶⁴と強調し、また他方で白人社会に関して「われわれは統治の才というものをひとり教養階層の子弟にのみ望むべきではない。むしろ自然の貴族なるものはそれとは逆に、よりしばしば粗野な辺境開拓者や頑強な体つきをした職人の家庭から現われるものである」⁶⁵と述べたとき、その獲得形質の遺伝と人為的な付加物を否定する自然の立場は劣等人種にたいする差別の永久的な固定化をめざすと同時に、白人社会に関しては逆に水平化の方向を志向するものとなっている。少なくともそこでは既存の支配体制を絶対視したり、その固定化・安定化をはかろうとするような姿勢は見られず、またオリガーキーの積極的擁護を企てようとする態度もない。いずれにせよこれらの発言からする限り、アメリカ学派の白人平等の論理は奴隷主寡頭制支配の正当性を基礎づけるというよりも、逆にそれを否定し解体に導くモメントをより多分に蔵していたと言うべきであって、それはアンテ・ベラムの南部社会の擁護論としては本来的に不適切なものを内包していたと言うべきであろう。

お わ り に

ルソーは『社会契約論』のなかで次のように述べたことがある。すなわち「最も強いものでも、自分の力を権利に、[他人の]服従を義務にかえないかぎり、いつまでも主人でありうるほど強いものでは決してない」。「いかなる人間もその仲間にたいして自然的な権威をもつものではなく、また、力はいかなる権利をも生みだすものではない以上、人間のあいだの正当なすべての権威の基礎としては、合意だけがのこることになる」⁶⁶と。これは要するに、物理的力にのみよる支配権力は一見いかに強力であるかのように思えても、じつは内面的に脆弱であること、むしろ安定した支配権力というものは服従者にたいして外面的な強制力的手段にうったえると同時に、内面的な正当性の信念にも強くうったえかけるものであり、体制によせる服従者のがわの自発的な帰依の念が高まれば高まるほど——つまり強制力にうったえる度合いが減れば減るほど——支配体制としては安泰であることをいち早く指摘したものであるが、本稿で取り上げた奴隷制支配というのはまさにこの「合意」を欠いた強制力のみ暴力的支配であるがゆえに、ルソーはこれを狂気の支配として否定したのであった。そしてまた南部の奴隷制擁護論に課せられていた課題も、この支配のこうした性格からして、ニグロ奴隷という直接的な被

支配者の説得や服従心の陶冶では最初からなく、外部の北部人ならびに南部非奴隷所有者という二者に向けての弁明ないし有和の弁を講じる作業に他ならなかった⁶⁷。アメリカ学派の論理はこの課題に対して有効裡に対処しえたであろうか。

アメリカの奴隷制度はニグロという白人とは別個の人種を支配する制度であるわけだが、——そして奴隷が異人種であるという点は奴隷制度の必須の条件では本来ないわけであるが——この人種と制度の絡み合った対象をなんらか単一の原理でもって十全のかたちで擁護しきことは、じつはきわめて難しい。しかもどのような原理に依拠してその正当性を基礎づけるかは、帰結の上に大きな相違を生むことにもなる。たとえば G. フィッツヒューはその労作『人みな食人種』（1857年）のなかでアメリカ学派とはまったく別個の家父長的な貴族社会を理想視するヴィジョンにもとづいて南部を賛美し、白人内部での身分的・階層的な格差についてはこれを当然視する態度をとったが、かれはそのさい人種的な区分原理（これはすでに見たように白人平等の立場を帰結しやすい）を拒んだがゆえに、奴隷は必ずしもニグロ人種に限定される必要はなくなり、そこからして当然に白人貧民を奴隷化すべし——この場合より厳密に言えば、かれは奴隷という抵抗の大きい言葉にかえて被保護者^{ワード}という表現を用いている——との提言すら行なうにいたったのであった⁶⁸。つまりフィッツヒューはニグロ奴隷制という複合体のうちの「制度」の方にもっぱら力点を置いてその支配・服従関係一般の正当性を論じたわけであるが、こうした擁護論が「人種」優劣の立場にたつアメリカ学派の社会観と本来的に相容れないものであることは、すでに見たところからして明らかであろう。たとえばフィッツヒューが「イギリスの白人労働者は南部の奴隷に加えられているよりも、もっと多くの痛苦を蒙っている」⁶⁹といった観点から奴隷の優遇と、この制度の美点を論じたのに対して、ヴァン・エヴリはかかる論法を頭から否定し、ニグロと白人労働者の比較など本来できはしないのであって、「ニグロは生れながらの優越者によって支配され、その人種のなかでも最善の状態に置かれている。しかるにイギリスの労働者は生れながらの同等者——ときには劣等者であることもある——によって支配され、みづからの人種のなかでも最悪の状態に置かれているのである」⁷⁰といった点を強調する。いずれにしてもその把握の仕方たるや正反対になっているわけであって、このフィッツヒュー的な社会観とアメリカ学派的なそれとの対立は南部思潮のうちにつねに底流として横たわっていたと言ってよい⁷¹。

こうした点を念頭に置いたうえで、人種学的論理の奴隷制擁護論としての効力を今いちど要約すればどうなるか。それはすでに繰り返したように自然法思想の立場にたつて、ニグロ差別と白人平等という二元的な姿勢をうち出すかたちをとっている。それは奴隷制擁護論として見た場合、この制度の正当性を人種という自然的・資質的なものに基礎づけるという点で、一見おおいに強固なものを予想させる。またそれは、「主人の優位と『奴隷』の従属というその社会秩序は永遠にながらえるであろう。なぜならそれは全能の神の崇高なおきて、人種のあいだの自然な関係、白人の体質的・永久的な優越性と、ニグロの体質的・永久的な劣等性に基礎を置いているからである」⁷²（ヴァン・エヴリ）といった言葉にも示されるように、「奴隷制の恒久化理論」⁷³（史家 W.S. ジェンキンス）として、絶対的な論拠を提供するかのような印象すら与える。

あるいはまた聖書の字句を引き合いに出して擁護論を展開するような立場に比べるならば、それはまがりなりにも実証科学の装いをこらしているという点で南部の依拠しうる「唯一の知的に敬意を表しうる奴隷制擁護」⁷⁴ 論（史家 T.F. ゴセット）であったと言いうるかも知れない。しかしひるがえってこれらの裏面をなす白人平等の理念について検討するならば、アメリカ学派の論理といえど決して表面的にそう映るほど完全な擁護理論を提供しえたわけではなかったのであって、その人種優劣の立場がちょうど奴隷制の秩序としての永遠性、自然性を保証しえたのと同じような意味で、白人平等の理念はぎゃくに南部非奴隷所有者にたいしてラディカルな体制批判の武器を提供しかねないという危険をはらんでいた。いわばその論理はスレーヴ・オリガーキーの安定化と同時にまた解体の方向にも等しく作用しうるものであったと言ってよい。史家ジェンキンスがその古典的著作のなかでアメリカ学派を南部の主要なイデオログのひとりに数えつつも、他方ではまたこの学派を「過激な思想家たちの少数グループ」⁷⁵ と表現してその孤立化の傾向、南部社会における思想的浸透面での限界性に論及せざるをえなかったのも——たんにこの学派の多元論的な立場が教会勢力とのあいだに摩擦を生じたといった、従来よく指摘されてきた外在的な事情においてのみ捉えられるべきではなく、むしろ本稿で取り扱ったように——この学派の思考の論理内在的な性格の面からも検討されてしかるべきであろう。そしていずれにしても叙上の事柄はフィッツヒュー的な立場をとるにせよ、アメリカ学派的な立場をとるにせよ、要するにひとつの原理に首尾一貫的に依拠しつつ南部奴隷制社会を十全のかたちでくまなく擁護しきることの困難さを示すものにほかならない。

註

1. William Sumner Jenkins, *Pro-Slavery Thought in the Old South* (Chapel Hill: the Univ. of N. C. Press, 1935, repr. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1960), p. 243. ジェファソンは『ヴァージニア覚え書』のなかで、ニグロが劣っているか否かの最終的な判断はこの人種を「博物学の対象」として慎重に観察したのち下さるべきであるとは述べているが、劣っていることをもって奴隷制の正当性に結びつけるところまではいっていないように思われる。Thomas Jefferson, *Notes on Virginia* (1782), 中屋健一訳『ヴァージニア覚え書』（岩波文庫），258-259頁。
2. Gilbert Osofsky, ed., *The Burden of Race: A Documentary History of Negro-White Relations in America* (Harper & Row Publishers, New York, 1967), p. 58.
3. Winthrop D. Jordan, "Introduction," in Samuel Stanhope Smith, *An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species*, ed. Winthrop D. Jordan (Cambridge, Mass., 1965), pp. xxxiv-xxxvi. W. スタントンはアメリカ学派の S. G. モートンの頭蓋骨収集がブルーメンバッハの *Decades Craniorum* (Göttingen, 1790-1838) に範を仰いでなされたことについても指摘している。William Stanton, *The Leopard's Spots: Scientific Attitudes Toward Race in America 1815-59* (Chicago, Illinois, 1960), pp. 29-30.
4. たとえば S. A. Cartwright "Natural History of the Prognathous Species of Mankind" (New York *Day-Book*, November 10, 1857) を見よ。prognathous は *pro* (before) と *gnathos* (the jaws) との合成語としてつくられたもので、このエッセーの中でカートライトは下等動物に見られる一般的な傾向を *face anterior, cranium posterior* というキュヴィエの言葉でもって表現している。Eric L. McKittrick, ed., *Slavery Defended: the*

- views of the Old South* (Prentice-Hall, 1963), pp. 139-141.
5. W. Stanton, *op. cit.* p. 32 の Table 1 を参照。
 6. W. D. Jordan, *op. cit.*, p. xxxvi, p. xlii.
 7. Josiah C. Nott, *Two Lectures on the Connection Between the Biblical and Physical History of Man*. (Originally published in 1849 by Bartlet and Welford. Reprinted 1969 by Negro Universities Press, New York), p. 22.
 8. たとえば Louis Agassiz の “..... it bears a striking resemblance, in several particulars to the brain of an ourang-outang.” といった言葉である。Quoted in W. S. Jenkins, *op. cit.*, p. 250.
 9. このような主張はたとえば J. H. Van Evrie, *Negroes and Negro Slavery* (Baltimore, 1853) の中に示されている。G. Osofsky, ed., *op. cit.*, pp. 105-106.
 10. これらは *The Christian Examiner and Religious Miscellany*, Vol. XLIX (Boston, July 1850) に掲載された Louis Agassiz のエッセー “The Diversity of the Origin of the Human Race” に見られる言葉である。Louis Ruchames, ed., *Racial Thought in America. Volume I. From the Puritans to Abraham Lincoln. A Documentary History* (The University of Massachusetts Press, 1969), p. 459.
 11. たとえば S. カートライトの前掲のエッセーにもこうした言葉が出てくる。E. L. McKittrick, ed., *op. cit.* p. 143, p. 147.
 12. L. Ruchames, ed., *op. cit.*, p. 460. Agassiz はまたすべての人種が同じ能力と傾向をもち、それゆえ同じ社会的地位を占める資格を有しているなどと夢想するのは “mock-philanthropy and mock-philosophy” にすぎないといった点をも強調する。 *Ibid.*, p. 458.
 13. Quoted in H. Shelton Smith, *In His Image, But.....: Racism in Southern Religion, 1780-1910* (Duke University Press, Durham, N. C., 1972), p. 160. J. C. Nott, *An Essay on the Natural History of Mankind* (Mobile, 1851), p. 15 からの引用。
 14. J. C. Nott, *Two Lectures*, p. 17.
 15. *Ibid.*, p. 17.
 16. “the servile race,” “inferior races,” “the lowest of the human species.” S. Cartwright の言葉。E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 146.
 17. the “corner stone of our Republican edifice” (Van Evrie, *Negroes and Negro Slavery*). G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 109.
 18. Quoted in H. S. Smith, *op. cit.*, p. 159. *An Essay on the Natural History of Mankind*, p. 4 からの引用。
 19. Quoted in W. S. Jenkins, *op. cit.*, p. 278.
 20. *Ibid.*, p. 244.
 21. L. Ruchames, ed., *op. cit.*, pp. 464-465. ここで Nott はコーカサス人種にかんして “Caucasian races” あるいは “those groups of races” といった表現をもちいている。つまりかれはこの人種というものを決して単一の純血種として考えていたのではなく、むしろ原始諸人種の混血によって生じたもの (“an amalgamation of an infinite number of primitive stocks,” “commingling of blood,” “this mixed stock of many primitive races”) として、より具体的にいえばエジプト人、ユダヤ人、アラブ人、テュートン人、ケルト人、スラヴ人、ペラスギ人、ローマ人、イベリア人等々の混血として生じたものと考えていた。そしてここからかれはコーカサス人種の “cosmopolite” な性格をみちびき出してくる。それゆえここにはナチス的なアーリア人種の純血を保持すべしといった類の思考は薄いことにもなる。
 22. *Ibid.*, p. 464.
 23. *Ibid.*, pp. 468-469.
 24. 史家 F. G. Wood や G. M. Fredrickson はそれぞれ Van Evrie を指して “the racist

- demagogue” “the first professional racist in American history” といった言葉で呼んでいる。Van Evrie 自身、『白人の優位とニグロの隷属』のなかで、本書を「科学的な著作」にする意図はないこと、むしろ逆に白人とニグロの相違を一般読者に理解させるうえで、動物学的・生理学的な基礎の真理をポピュライズしうれば本望であることを強調している。Forrest G. Wood, *Black Scare: The Racist Response to Emancipation and Reconstruction* (University of California Press, 1968), p. 9; George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914* (Harper & Row, New York, 1971), p. 92; John H. Van Evrie, *White Supremacy and Negro Subordination; or, Negroes a Subordinate Race and (so-called) Slavery Its Normal Condition* (Originally published in 1868 by Van Evrie, Horton & Co. Reprinted 1969 by Negro Universities Press, New York), p. 38.
25. Van Evrie, *op. cit.*, p. 188.
 26. *Ibid.*, p. 31. Van Evrie によれば奴隷制反対運動はまったくの「妄想」でしかなく — “a simple delusion,” “‘anti-slavery’ delusion” — この *White Supremacy and Negro Subordination* の第I章の表題じたいが Causes of Popular Delusion と名づけられている。そしてこの「妄想」たるや、そのオリジンにおいてヨーロッパ的・君主主義的であり、モナキストにかぎって、平等の原理をニグロにまで適用せんとする愚に固執するという。*Ibid.*, p. 32.
 27. *Ibid.*, p. 28 (“the ignorant and degraded multitudes of their own race”).
 28. “the natural equality that God has stamped upon the race” (*ibid.*, p. 186), “the inherent and eternal equality that God has stamped forever on the organism of the race” (*ibid.*, p. 202), “that fixed, natural, and unchangeable equality which God has stamped forever on the organism of the race” (*ibid.*, p. 289) といった表現が随処に出てくる。このほか “the instinct of equality” (*ibid.*, p. 186) といった表現、あるいは “this great, fixed, and eternal fact, embedded in the physical and mental organism of the race” (*ibid.*, p. 291) といった表現など、似たような言い回しが繰り返しあらわれる。
 29. *Ibid.*, pp. 182-184.
 30. *Ibid.*, p. 28 (“the ignorant, darkened, and miserable millions of their own race”), *ibid.*, p. 31 (“their own wronged and oppressed millions”).
 31. 史家 G. M. Fredrickson はこの二元的な態度を “the ideological marriage of intraracial egalitarianism and overt Negrophobia,” “a peculiarly radical conception of white democracy” といった言葉で表現し、他ならぬ John H. Van Evrie こそは “the leading proponent of this synthesis” であったと位置づけている。G. M. Fredrickson, *op. cit.*, pp. 91-92.
 32. G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 107.
 33. たとえば次のような言葉である。 “the originators and champions of democracy in America,” “the firmest and most reliable defenders of democracy,” “the earliest, most consistent, and most reliable champions of democracy in America.” Van Evrie, *op. cit.*, p. 274, p. 277.
 34. *Ibid.*, p. 277.
 35. *Ibid.*, pp. 290-291.
 36. *Ibid.*, p. 302.
 37. “the democratic ideas of Virginia” (*ibid.*, p. 280) と “the Northern oligarchy” (*ibid.*, p. 287) との対比は主として建国期に関してなされているかに見えるが、Van Evrie の基本的な考え方からするかぎり、この図式は当然かれ自身の生きた19世紀半ばにまで敷衍されているとみてよい。
 38. このちがいはそのまま新旧両秩序を代表する “American democracy” と “British oligarchy”

の相克に連なるものである。 *Ibid.*, p. 286.

39. *Ibid.*, p. 277.
40. *Ibid.*, p. 281.
41. *Ibid.*, p. 282.
42. *Ibid.*, p. 283.
43. *Ibid.*, p. 285.
44. これらの語句はいたるところに出て来る。たとえば気づいたところで拾ってみても, “natural law” (*ibid.*, p. 190. 以下, ページはすべてこの同一書のもの) ないし “the natural order of things” (p. 339), “natural order” “natural relations” と “human force or accident” との対比 (p. 202), あるいは “human institutions” (p. 221), “things of human invention” (p. 323) といった言葉, さらに “not artificially or accidentally, but naturally” (p. 275), “factitious, temporary, or accidental” (p. 277), “accidental and artificial” (p. 290) といった語法などである。“artificial distinctions” と “natural distinctions” との対比については, とくに p. 283, p. 285, pp. 290-291, pp. 322-323 で詳細に論じられている。
45. *Ibid.*, p. 259.
46. *Ibid.*, p. 300.
47. *Ibid.*, pp. 300-301.
48. *Ibid.*, p. 307, pp. 336-337.
49. Vincent Freimarck & Bernard Rosenthal, eds., *Race and the American Romantics* (Shocken Books Inc., 1976), 谷口陸男監訳『奴隷制とアメリカ浪漫派』(研究社) 115頁。
50. William H. Pease and Jane H. Pease, eds., *The Antislavery Argument* (The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1965), pp. 20-21.
51. Winthrop D. Jordan, *White over Black: American Attitudes toward the Negro, 1550-1812*. (University of North Carolina Press, 1968), p. 410.
52. F. G. Wood, *op. cit.*, pp. 17-18.
53. この点に関してたとえば『インディペンデント』紙の主筆 T. ティルトンは, すでにリンカーンの奴隷解放宣言から数カ月後の講演のなかで, ニグロ擁護の立場に立ちつつ次のようにきわめて卓越した指摘を行なっている。すなわち, 『『ジャーナル・オブ・コマース』のいうように『反感はもはや奴隷に対してではなく, ニグロに対して向けられているのである』。鎖につながれていると否とを問わず, 軀の下に置かれていると否とを問わず, ニグロに対して今や決然たる敵意がみられる。人々はいかれの肌色を忌みきらい, その頬を打ち砕くべく手を振りあげている。それゆえわれわれの嘆願はもはや奴隷のためになされる必要はない。そうした論議はすでに過去のものでしかなかったのだ。それは一月一日(奴隷解放宣言の日)をもって過去のものとなったのである。必要な嘆願はいまやニグロのためになされねばならない。G. Osofsky, ed., *op. cit.* p. 101. 奴隷制が敷かれていたときには人種分離はおこなわれていなかったという歴史家の側の指摘については, たとえば C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* (the Third Revised Edition, Oxford University Press, 1974) 清水博・長田豊臣・有賀貞訳『アメリカ人種差別の歴史』(福村出版), 24-26頁, 36-37頁を見よ。またジム・クロウが北部生れの制度であるということについては本書30頁を参照。
54. Van Evrie のこの奴隷制擁護の著作が出版されたのは1868年という戦争直後のことであるが, このこと自体かれの論理の性格をよく示している。Van Evrie 自身がこの書の序文で叙べるところによれば, 本来これは A. リンカーンの大統領選出時に公刊されたものであった。Van Evrie, *op. cit.*, p. v.
55. Fitzhugh のこうした側面は周知のとおりであり, 改めて指摘するまでもないところである。たとえば C. Vann Woodward, “George Fitzhugh, *Sui Generis*,” in George Fitzhugh,

Cannibals All! Or, Slaves Without Masters, ed. C. Vann Woodward (Cambridge, 1960), p. xxxviii.

56. Quoted in W. S. Jenkins, *op. cit.*, p. 276.
57. この点についてはすでに二、三の歴史家からも従来指摘されてきたところであり、改めて言を重ねる必要はないが、たとえばアメリカ学派に関する古典的な研究書ともいべき W. Stanton, *The Leopard's Spots* は、(1)アメリカ学派のドクトリンが公正なる科学研究の結果、到達されたものであり、(2)それは奴隷制擁護論の基礎づけとして活用されていたならば、大きな効力を発揮していたであろうこと、(3)しかしその多元論のテーゼはオーソドックスな宗教的信念とは相反するものであったため、いきおいそれは anticlericalism の傾向を帯びざるをえず、その流布にも一定の限度があったことを指摘したものである。この定説に対して異議を唱えるのは史家 G. M. Fredrickson ぐらいのものであり、かれはアメリカ学派の説はたしかに反聖書的ではあったが、そのゆえをもってかれらの説が大きな障害に直面したとはみなしえいと主張している。G. M. Fredrickson, *op. cit.*, pp. 76-82.
58. Louis M. Hacker, *The Triumph of American Capitalism: The Development of Forces in American History to the End of the Nineteenth Century* (Columbia University Press, 1947), 中屋健一・三浦進訳『資本主義の勝利』(東京大学出版会), 下巻, 118頁。
59. E. L. McKittrick, ed., *op. cit.* p. 174.
60. 史家 Woodson はすでに1916年というきわめて早い時期の論文で、ジャクソン民主政と呼ばれる一時期がじつは自由ニグロの側からすれば——その前後の時期がそれぞれ「寛容の時期」(1800-1826年)、「(待遇)改善の時期」(1841-1861年)と呼びうるのに対して——ことさらに苛酷な「迫害の時期」(1826-1841年)であったことを論証している。C. G. Woodson, "The Negroes of Cincinnati Prior to the Civil War," *Journal of Negro History*, vol. I (January, 1916), p. 2.

ジャクソン期ニューヨーク州、ペンシルヴェニア州における自由ニグロの選挙権剝奪に関しても、すでに早くから取り上げられてきたところである。たとえば C. H. Wesley, "Negro Suffrage in the Period of Constitution-Making 1787-1865," *ibid.* vol. XXXII (April, 1947), pp. 154-160, pp. 162-165; Benjamin Quarles, *Black Abolitionists* (Oxford University Press, 1969), pp. 170-175.

また自由ニグロが "an anti-Jackson man" であり、むしろフェデラリストの系譜をひく保守派のほうがニグロに同情的であったこともすでに定説化しているといつてよいであろう。たとえば Leon F. Litwack, *North of Slavery: The Negro in the Free States, 1790-1860* (The University of Chicago Press, 1961), pp. 80-83, p. 87 を参照。いずれにしてもジャクソン時代の特徴は、「多くの州においてニグロの公民権剝奪は、白人にとってのあらゆる障害が除去されたのほとんど時を同じくして起った」(B. Quarles, *op. cit.* p. 169) といった言葉、あるいは「いくつかの州において白人男子普通選挙制の採用は、そのまま直ちにニグロの公民権剝奪へと通じるものであった」(L. F. Litwack, *op. cit.*, p. 75) といった逆説的な事態のうちに求めうると言つてよい。

ポスト・ベラム期の南部革新主義運動については C. V. ウッドワード『アメリカ人種差別の歴史』105-106頁を見よ。

61. Van Evrie, *op. cit.*, p. 290.
62. ウッドワード, 前掲書, 105-106頁。
63. Van Evrie, *op. cit.*, p. 181.
64. J. C. Nott, *op. cit.*, pp. 35-36.
65. *Ibid.*, p. 45. ここで Nott が使用している "nature's noblemen" という言葉は、「自然の貴族制」と「人為の貴族制」とを対置し、前者を称揚したT.ジェファソンのアダムズあての手紙(1813年)を想起させる。すなわち、「人間の間には自然の貴族制があるということに…

…私は同意します。この貴族制の基礎は、徳と才能であります。……(中略)……一方、富と出生にもとづき、しかも徳も才能もどちらも欠いた人為の貴族制もあります。と申しますのは、もしそれに徳と才能がそなわっていたら、それは自然の貴族制だからです。自然の貴族制こそ、社会の指導や信頼や政治のために、自然が賜ったもっとも高貴な賜物であると私は思っております。このような自然の貴族を政府の官職に送りこむ純粋な選挙を、もっとも効果的に準備している政府の形態こそが、最良の形態であるといってもよいのではないのでしょうか。人為の貴族制は、政治上有害な要素でありますから、その相続を阻止する規定が設けられねばなりません」。ここからジェファソンはかれの起草した二つの法律（限嗣相続および長子相続の特権を廃止する法律）に言及して、それらは「偽貴族制の根もとに斧をうち込んだものです」と自賛したのであったが、backwoodsman や mechanic にさえ自然の貴族の資質をみとめる Nott の発言は、こうした措置を越えてさらにラディカルな体制批判の方向にむかう可能性をひめているといってもよい。Saul K. Padover, ed, *Thomas Jefferson on Democracy* (Appleton-Century-Crofts, Inc., 1939), 富田虎男訳『ジェファソンの民主主義思想』（有信堂），95-96頁。

66. Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat social* (1762), 桑原・前川訳『社会契約論』（岩波文庫），19-22頁。これは言いかえれば、物理的力というものはそれがいかに強力であろうとも、決してその行使の結果として正当性の信念を生ぜしめることはないということを最も早い時期に指摘したものでもある。
67. 奴隷制擁護論をめぐる学説についてここで一言しておくならば、本稿ではアメリカ学派の思想が奴隷制擁護論としてどの程度有効裡にその対象を擁護しえたかといった点についてもっぱら見てきたわけだが、じつは周知のようにこうした見方とはまったく別の立場をとる学説がある。それはいわば南部のプランターたちについて、かれらが一方では自由・平等を旨とする建国の理念に深い愛着を覚えつつも、他方ではまた奴隷の所有者でもあるというその矛盾したあり方のゆえに大きな内面的葛藤を生じていたと推定し、奴隷制擁護論はまさにかかる罪意識を癒やすべく登場したものに他ならなかったという心理的な解釈を企てる立場である。したがってこれによれば、奴隷制擁護論なるものは外部向けというよりも、むしろプランター自身の内面的な治癒を意図していたということになってしまう。しかしあえて言うならば、こうした解釈は当事者の自覚的な主観を越えた意識下の問題を云々するものであって、当人の語った言葉によってこの点を立証することは本来困難な事柄となっている。また少なくとも当時の人々の発言や出回った出版物から判断するかぎり、——つまりこれらを生み出した深層の無自覚的動機ではなく、客観的に表明されたところの発言内容を問題とするかぎり——擁護論の効用をプランターの内面にのみ限定しなくてはならないような説得的な根拠はないように思われる。もっともさらに言うならば、この問題は次のように考えてみることも可能かも知れない。すなわち、擁護論の生れてきた心理的発生過程ないし個人的由来がどうであったかという事柄と、他方、あるイデオログによって表明されたところのその擁護論が社会的・客観的にどのように機能しえたか、また擁護論として対社会的にどれほど有効でありえたかといったこれら二つの事柄は、論理的にいってまったく別個の問題であり、したがって学説の対立というものもじつは次元を異にしたものに過ぎない、と。
68. George Fitzhugh, *Cannibals All! Or, Slaves Without Masters*, ed. C. V. Woodward (Cambridge: Harvard University Press, 1960), p. 223.
69. *Ibid.*, p. 158.
70. G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 108.
71. こうしたフィッツヒュー的な “a seigniorial society based on the image of a patriarchal plantation” と、ミリタントな人種主義者たちの “a democratic and egalitarian society for whites” との社会観の相克を指摘したものとしては、G. M. Fredrickson, *op. cit.*, p. 61 を参照。
72. Van Evrie, *op. cit.*, p. 203.

73. "the true basis of the perpetual theory of slavery." W. S. Jenkins, *op. cit.*, p. 275.
74. "the only intellectually respectable defense of slavery"あるいは"an excellent rationale for the defense of slavery"といった表現を用いている。Thomas F. Gossett, *Race: The history of an idea in America* (Southern Methodist University Press, Dallas, 1963), pp. 65-66.
75. "a small group of radical thinkers." W. S. Jenkins, *op. cit.*, p. 279.

原稿受理 1980年12月1日

An American School of Ethnology

— Theory in Defense of Slavery —

Tadashige Shimizu

In ante-bellum America, the so called "American school of ethnology" affirmed the polygenesis thesis that the races of mankind were created separately as distinct and unequal species and that the Negro was an inferior creature by nature.

The originator of this school was Dr. Samuel George Morton, whose *Crania Americana* and *Crania Aegyptiaca* were the results of years of collecting and examining human skulls. He contributed to laying a firm scientific foundation to the theory of the biological inferiority of the Negro and to the deduction of the thesis of the self-evidence of the Negro's subordination to their white rulers.

John H. Van Evrie, based on Morton's works, insisted a Janus-faced theory asserting on the one hand an intraracial egalitarianism (i. e. white democracy or "Herrenvolk democracy") and on the other an undoubted belief in the justice of Negro slavery. When we investigate the validity of his doctrine as a defense of the Old South, the concept of the biological inferiority of the Negro can be said to be effective in defending slavery as a natural order of things; in this phase as a "perpetual theory of slavery," it contributed to the southern regime. But the idea of white democracy, which constituted an indispensable part of his biological social view, was fundamentally incompatible with the existing state of the southern plantation aristocracy. So the militant racists' logic had the dual effect of aiding in the maintenance of the Slave Oligarchy and in quickening the dissolution of it.